

今村清之助と証券界・明治経済

東京証券取引所 金融リテラシーサポート部
石田 滋宏氏

こんにちは。私は今、ご紹介いただきました東京証券取引所金融リテラシーサポート部の石田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日は大変な状況の中、みなさまにお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

それでは今まさに（紹介の方から）NHKの大河ドラマのお話がありましたが、私も大河ドラマでどこまで取り上げられるのかと気を揉んでいまして、噂によると東京証券取引所が取り上げられないのではないかと？されて、ちょっと焦ったりもしているのですけれども、渋沢栄一さんの生涯の中で、今日、お話します今村清之助と田中平八との出会い、そして三人でやったことというのは、実はかなり面白いエピソードなので、できたらイケメンの俳優を今村清之助にあてていただいて、NHKの大河に出てきてもちっとも恥ずかしくない事件ですし、ぜひ今村さんの良いところを皆さんと共有していければと考えている次第です。

実は講演の前にひとつだけお願いしたいことがございまして、講演中、過去の偉人についていろいろ出てきますけれども、敬称をすべて略した形でお話させていただきますので、その点をぜひご了承くださいたいと存じます。

講演のタイトルは「今村清之助と証券界・明治経済」です。私はうかつにも2016年ごろまで今村清之助という名前すら知らなかったのですが、ちょっとこの本が見えますでしょうか。『証券市場誕生』というこの本、証券史上を語るにあたってこの本を書いたのですが、その際に日本の証券界の成り立ちを調べてまいりますと、日本の証券界は二人の信濃の人なしには始まらなかったということが分かってきました。一人は今村清之助で、もう一人は駒ヶ根の田中平八ですね。信州人であるみなさんはよくご存じと思いますが、明治の日本経済というのは信州なしには始まらなかったと言われていています。今日はそういうお話を中心にお話をさせていただこうと思っております。

ではここから資料の方を画面に写して参りますので、よろしくお願いいたします。

では本論に入らせていただきます。

今村周吉、後の今村清之助、今日の主人公ですが、1849年信濃国伊那郡出原村、現在の高森町に生まれました。ちょうど今から170年ぐらい前ですよね。江戸期の末期で、そこから20年たつと明治維新になるという、ちょうどそういう時期です。清之助が生まれて3年後にペリーが来航しまして黒船騒ぎというものになり、1859年に横浜が開港するということになります。ちょうど清之助が10歳の頃だと思います。

この横浜開港というのが、実は日本経済史上、非常に大きな出来事なのです。私は学校で明治維新のことを習った時に、ペリーが来て条約を結んで、横浜が開港になって鎖国が終わった。そのあと坂本龍

馬や西郷隆盛なんて話が出てきて、その後のところを勉強した記憶がないのです。長野の学校はちょっと違うのかもしれませんが、とりあえず日本にとって大事なのは、横浜が開港したということではなくて、実は横浜が開港した後に起こったことが実際に日本をすごく変えて行ったわけです。

今日の主人公であります清之助にとっても、また平八にとっても、実は横浜が人生を変えていくということになります。横浜で人生が変わった人というのは、実は清之助と平八だけではなくて、日本の明治の最初のころの日本の経済を作ったありとあらゆる人たちが、横浜から出てきているということがございます。例えるならば、最近ですけどね、アメリカのシリコンバレーからビル・ゲイツだとかスティーブ・ジョブズだという人たちが出てきて、アメリカが凄いことになったのと非常に似ています。まあ、横浜からもどんどんとすごい人が出てきて、まさに横浜で起こったことがすごく大事なことなんですね。

では横浜で何が起こったのかと言うと、みなさんがご存じのように、貿易が始まったわけですね。貿易、特に生糸の輸出ということ、それから貿易に伴って当然、日本の貨幣といわゆる外国の貨幣との両替が起こる。僕たちが今の言葉で言えばFXっていうわけですけども、それが始まった。この二つの出来事が、清之助と田中平八の運命を大きく変えていくことになります。今日はそのことをさらに詳しくお話していくことになると思います。

1860年、横浜開港の翌年に、田中平八が横浜で商売をしていたという記録が残っています。その3年後ですね、16歳だった清之助が横浜へ、伊那の知り合いを頼って出ていく。事実上の家出なんですけれども出ていく。伊那の知り合いには断られてしまって、実際には横浜の平野屋市五郎さんという方の商店に転がり込んで、そこで丁稚奉公なんかをしていたら、探しに来た家族にみつかって連れ戻されるというエピソードが、これは過去に出版されている清之助さんが紹介された本なんかでは必ず紹介されているエピソードなんですけれども、そういうことがあったということです。

おそらくその1年後の1861年に平八さんが糸屋という自分のお店を作って独立したということがあります。

ということでこの画面の下のところに『横浜市史稿』の写真を載せていますけれども、これは実は横浜市が公式に編纂した歴史の本でして、その中に1860年、横浜が開港した翌年に、横浜にいる日本人商人の一覧というのが載っているんですね。その中の一部を抜粋して拡大したものを画面に出しているんですが、この画面の拡大部分の右から3番目のところに平野屋惣次郎というのがあるのが分かっていますでしょうか。この平野屋惣次郎が、私が調べた限り他に平野屋というのが出てこないもので、おそらく平野屋惣次郎がこの平野屋だと思います。これは60年ですから61年には平野屋というのに変わっていたんだと思いますけれども、この平野屋、場所も同じような場所なので、多分ここだと思います。

それでこの平野屋さんというお世話になったということなんですけど、さらに左側にちょっと行くと上州屋田中平八という文字が目に入ります。これがさっき言いました1860年にすでに横浜で平八がビジネスをしていたという記録なんですね。これが平八が横浜で名前が出る一番最初の記録だと思いますが、こういうふうにして名前が出ていることがあって、おそらく清之助が頼ったっていう伊那の知り合いって、誰も書いていないんですが、私は多分、上州屋田中平八ご本人なのか、あるいは上州屋にいる田中平八の知り合いの伊那人を清之助は頼ったのではないかと勝手に想像しています。特に根拠があるわけではありません。

それで1867年に、平八が独立した2年後ですね。清之助は再び横浜に出て来まして、この時には平野屋さんは潰れてしまってなかったんですけども、清之助が出てきた翌年に、それは明治元年になるんですが、田中平八は横浜で両替会所というものを作っています。この辺の関係はあとで深く細かく説明しますが、どうもこういうものを見ていると清之助は横浜に再び出て行って、糸屋の、田中平八の直接ではないと思いますが、わりとその周辺で平八のお仕事を何となく手伝っていたような気がします。いろいろな仕事をしていたというふうになっていますが、手伝っている中には生糸の売り込みって言って、生糸を売りに行ったり、あるいは生糸の産地に買い付けに行ったりという仕事をやったり、あるいは実は糸兵は外貨の交換みたいな業務もやっていたので、外貨の交換所みたいなこともチャレンジしたりというようなこともやっているうちに、田中平八が両替会所を作った時から清之助はそこで才取という、すぐあとで説明しますが、お仕事を始めるということがあったらしいということが、一応、分かります。

さて糸平（平八）がさっき、上州屋田中平吉生糸売込商と名前が出ていたわけですけども、あれは一体どういうことなのかということですね。そこから明治の話に入っていきたいと、明治というか、清之助と平八の話に入って行きたいと思います。まずは上州、生糸ということ 키워ドにしてですけども、2005年に長野県の駒ヶ根で行われた講演の時に岩下嘉光先生という方が、糸平は12歳で飯田の魚屋さんに行って、雑貨商で年季奉公に出されて、19歳の時に飯田の藍玉を作っていた藍屋さんの婿養子になった。そこで藍屋の商売をしながら生糸も商ったのではないかなというふうなおっしゃっています。生糸を商ったというのは証拠がいろいろあるのだと思いますが、実は当時からみなさんご存知のように信州というのは生糸の一大生産地、江戸時代を通じて一大生産地だったわけですけども、そこで作られた生糸が江戸に行くまでの間に、必ず上州前橋でいったん集積されるんですね。そこで、上州前橋の生糸仲買商というのは結構、信州に頻繁に出入りをしていたんですね。そういうこともあって、おそらく平八は若いころから上州前橋の生糸商人となんらかの繋がりを持っていた。そして繋がりがあって上州のどこかの上州屋という名前のついている生糸問屋と一緒に横浜で商売を始めて、それが横浜の上州屋田中平八というものにおそらくなっているはずですよ。

次に当時の開港した横浜と平八がやっていた仕事、生糸売込商というのをキーワードに読み込んでいきます。今までは単純に信州でできた糸が？していたんですけども、横浜が開港して生糸が輸出されていくことにわけです。その時に膨大な量が横浜から出ていくことになります。実は日本は横浜が開港してもそんなに売れる物がなかったわけですけども、唯一、生糸だけは海外からすごく注目されていたんですね。

その理由は、日本の生糸の品質がその当時はよかったというのもあったんですけども、もう一つはヨーロッパやアメリカと同じ種類の蚕だったんです。それが疫病でばたばた死んじゃうようなことがあって、アジア、特に日本と中国の生糸がすごく注目されていて、まさにニーズがすごく高かったんですね。なので大量に買い付けが行われているので、横浜でそれを売りたい、けど今までの江戸に物を運ぶだけのビジネスをやっていた人たちがいきなり横浜の外国商館に行って、「家の生糸を買ってください」という手がない、どうやっていいか分からない。そこで実はそういう国内の生糸を横浜の外国商館に持ち込んで、「この生糸、いいでしょう。買ってくださいよ」みたいな売込をする人たちが現れるんですね。

これが生糸売込商です。

おそらく糸平は、上州の上州屋さんという前橋辺りの生糸の仲買人さんに「僕が横浜に行って外国人に生糸を売ってあげるから、とりあえず横浜にお店を出しなよ。僕が横浜支店長で頑張るから名前を貸して」みたいな感じで、横浜で 1861 年、開港の翌年からそういう仕事を始めたんじゃないかなと想像しています。別にそんなことを細かく誰も書いて残してないんですけども、上州屋田中平八という名前すら本に出てくるとは滅多にないので、おそらくそういうことでここに名前が出ているのではないかと思います。(講演の時にはこのように申し上げましたが、実際には飯田の京都向けの生糸問屋の横浜支店長のような事をされていたそうです)

1860 年には、後々の？生糸売込商で、日本で最も有名になる亀屋の原善三郎、野沢屋の茂木惣兵衛という日本で最大の生糸売込商ですらまだ名前が出てこないのに、糸平はかなり早い段階から生糸売込商をやっていたし、名前が出ているってことはただの手代とか下っ端ではなくて、それなりの格があって、そこでビジネスをやっていたということなんだと思います。

そこで皆さん、何となくお分かりになると思いますが、外国商館に行って、いきなり生糸を持ち込んで売ってというのは、古い江戸のビジネス、信州で生糸を買って江戸に運ぶみたいな古いビジネスでやっているだけの商人たちには、とてもではないけれども対応できないというので、これは実はまったく新しい新ビジネスだったんですね。

なのでこれに結構、新しい人材が入ってくる、要するに糸平みたいに何の筋目もない、背景もない若者が、いきなり横浜で名前が出てくる。ふつうの江戸期の商売ではないわけですね。横浜だから新ビジネスが行われたと言えます。

開港前の横浜はどういうところだったかと言うと、実はただの漁村でした。全然、有名でない漁村で、ちょっとした景勝地としては知られていて、ちょこっとだけ別荘地がある程度のすごく鄙びた漁村だったんです。ここに埋め立て前の横浜の？がありますけれども、こんな感じだったんです。横浜を開港することに決まってここを埋め立てて、人工的な外国人居留地を作ってその周りに日本人が店を構えた。その時の日本の商人で最も有名な人の一人が三井家の三井八郎右衛門ですが、彼も幕府から強く要請されて、三井呉服店を横浜に開いています。

それまでに三井の支店は大阪と江戸と松坂と京都にしかお店がなかったんですが、それが横浜にも開かなくてはいけなくなって、さらにさっき言ったように外為取引、外国のお金の両替が始まりますので、両替商としての三井も手伝ってくれと言われて、横浜に両替商の三井組の支店も作るようになったのです。この右下のグラフを見ていただきたいのですが、1859 年、横浜の開港後からしばらくの間の貿易業、青が輸出で赤が輸入なんですけど、見てください。1859 年にはこれだけしかないんですが、翌年から突然、10 倍ぐらいの規模に膨れ上がって、どんどんどんどん、毎年毎年、増えていくというような、非常に貿易の規模が大きくなっていったのを見ていただけたと思います。輸出だけでなく輸入も増えていることも見ておいてください。

横浜って、何をやってもよいということではないのですが、例えば輸出してはいけない物というのは、実は米と麦と銅くらいで、それ以外の物は何を輸出してもよいというくらいになっていて、商売が実はすごく自由だった。江戸や他の日本では考えられないくらい自由さがあって、要するに他の日本ではあまり伸びていく隙間のない苦しいところを、何も財産を持たない？みたいな若者たちが、横浜だったらやっていけるってことが凄く伝わってきて、みんな横浜に殺到する。特に平八と同じ生糸売込商にな

りたがったと言われています。それで横浜開港当初の商人で一番多かったのが生糸売込商で 120 人ぐらいいたと言われています。競争がすごく激しくて、実は老舗の大商人でもすぐに駄目になるというみたいなことがあって、非常に腕と能力が問われる、難しいビジネスだったと言われています。

一体その生糸売込商とは具体的にどんなビジネスだったのかを、これからご紹介します。この図の右側が横浜にいる外国商館、外国人商社ですね。左側に国内の生糸生産業者、例えばまさしく信州ですね。信州で生産されている生糸を横浜の外国商館を通じて輸出していくわけですが、その間に外国人にそれを売り込みに行く生糸売込商というのが現れる。生糸売込商は何をしているかというと、外国商館って全部で 100 ぐらいあったのですが、いろいろな所に入出入りして、それぞれの外国商館がどんな生糸を欲しがっているのかをヒヤリングして御用聞きしたり、どんな品質でどのくらいの数量で、いくらぐらいならば生糸を買ってくれるのかみたいなことを聞いて回って、情報を仕入れて、その情報をもとに国内の生糸業者のところに出かけていく。海外での需要動向や横浜ではどうかという話を聞いて、自分の地元に戻って、こういう生糸をこのくらい欲しいんだけどなど話していくわけですね。

その時にふつうは、「その生糸、いいじゃない。横浜で売れるから売って来てあげるよ」って言って、それを預かって横浜に持って行って売ってあげるっていうのが本来の生糸商で、つまりそこで買取するわけではないのです。あくまでも預かって行って、横浜に持って行って、売れたらその手数料を生産者からいただきます、というのが生糸売込商の本来の姿ですね。

そうなんですけれども国内の製糸業者にしてみれば、実は生糸売込商というのは他にも競争相手がたくさんいるのです。そうしたらその中でなるべく高く買ってくれる人に売りたいわけですし、手数料の安い人に売りたいし、なるべく知り合いの人がよいとかいろいろあるわけですが、やはり生糸売込商が「こういう生糸はないか」と言った時に、数量とか品質がそれに合致するような物って、即座に出来なかったりするわけです。そうすると、生糸農家自身が自分たちで投資して生産量が上がるようにしていかなくてはならないわけですが、これは自分たちでは難しいわけですね。基本的に農家さんにはなかなかそのお金がない。なのでこういうスキームになると、誰かが最初にお金をぽっと農家の人に渡して、農家の人がお金をあてに生産量を増やして、それによっていわゆる外人のニーズに応える仕組みが必要になったので、結局、生糸売込商が最初にお金を、生糸が売れる前に、信州の製糸業者のところに行って、お金をほいっと渡して、その生糸を預かってくる、ということをするんです。

ほいっと渡す最初のお金というのが、結局、大変で、それを平八は上州屋さんから借りて、それを持って行って、地元から生糸を仕入れて、それを在外公館へ持って行ってやっとお金にかわる。膨大なお金で売れたそうです。今に伝わっている噂によると 300 両が 3000 両になったみたいな、それは話をぼっていると思いますけれども、それくらい儲かったんです。そういう仕組みなんですね。儲かっている上にさらにこれはあくまで委託販売という形をとっていますから、先に渡した代金の中からさらに売買手数料と、荷物を預かって保管している保管料と、売れるまでの期間、お金を貸してあげているってことだったんですが、金利までとっちゃう。結構、そういう人物が生糸売込商です。

その代り、生糸を集めて横浜に持っていく場合、横浜でどういう生糸が欲しがられているかっていうのは、日々、変わるんですね。値段も変わるので、いくらで買い付けてくれるのかっていうのも腕前だし、どういう生糸をどこに買い付ければよいのかっていうのは、生糸売込商の情報をどうやって集めるか次第だったので、ここがすごく難しかった。なおかつ都合のよい生糸を、国内の製糸業者が売ってく

れるかどうか分からない。コミュニケーションですね。ものすごい商売の能力が必要だったことをお分かりいただけるとと思いますが、非常にそういうことなので、折角、お金を用立てて買ってきても、結局、売れなければすぐ破産なので、なかなか厳しいビジネスでした。

ちょっと付け足して言うておきますと、生糸売込商が横浜外国商館で生糸を売れた時には、代金はもちろん向こうのお金、洋銀で払われる、生糸売込商はその払われたお金でもってまた国内に糸を買い付けに行かなければならないですから、それを日本の一分銀に替えなければいけないですね。それをやってくれる人たちが両替商で、まあドル屋？と言ってましたという話があるので、この話はまたあとでお話します。

そしてさっき見せました図はあくまでもすごく初期の生糸売込商で、生糸輸出の時の一つのパターンだったのですけれども、明治になりまして10年もたつと、貿易もすごく広がっていきます。その中で、実は今、みなさんにお見せしているような、ちょっと複雑な形に進化していくんです。

なぜこのような形に進化していったのかをこれから説明するのですが、実はこの形が日本全国に、地方各地に広がって行って、ここに銀行がついて、銀行も広がっていたという明治の最初の産業化の典型的なパターンなんですね。それが生糸から始まったということで、それを皆さんに説明していきたいと思っています。

さっき言いましたとおり、明治も10年がたつと、ものすごく大量の生糸の輸出の？が行われていきます。大量に輸出を行っているということは、生き残っている生糸売込商はものすごく儲かっていますね。

実は日本で明治以降、最初のお金持ちというか難しい言葉で言えば商業資本家というんですが、これは実は生糸売込商だった。生糸売込商はたくさんお金が儲かって、いろいろなビジネスに投資しようとして、実はこの頃、渋沢栄一がちょうど、日本全国に銀行を作っていこうと構想してしまっていて、そういう流れがあるので、この生糸売込商たちもお金を出し合って、横浜に大きい銀行を創ったんです。そのようにしてお金を次のビジネスに投資するというのをやっていく。

一方、国内の生糸生産業者も実はこうやって長い間？している間に生糸をたくさん作って売っていますから、地元、例えば信州一妻籠？間の生糸製糸業者、お金持ちの資本家がぼちぼち現れてくるわけですね。こういう資本家たちも、さらにたくさん糸を作れというニーズが高まって、もっともっと機械化していかなければならない。もっともっと？というのは、生糸売込商がお金を出す、これが繰り返されていくんですね。この時に、昔だったら懐に小判を詰めて走って行って、生糸農家にぽんとお金を置いて「これで糸を作ってくれ」と言えたわけですが、さすがにこの頃になると懐にお金を持っていくわけにいかないではないですか。「折角、横浜にも銀行があるし、君たち生糸生産農家の地元にも銀行があればよいよね」、あるいは長野で作った生糸って八王子を経由して横浜に入っていく、みなさんご存じのように日本シルクロードを通して入っていくわけですが、「八王子にも銀行があったら便利だよ」というようなことが言われていくわけです。そういう、生糸売込商がお金の融資とか便宜を計ってもらうためには銀行が必要だということで、国内の製糸業で儲かった人たちがみんなでお金を出し合って、自分の地元に銀行を作っていくんです。まさに渋沢たちがやっている「銀行を作ろう」みたいなルートに乗っかって、在地の銀行を作っていく。その在地の銀行と横浜の銀行の間で為替の振替をすればお金は移動しなくて生糸だけ動けば済むわけですから、そのようなことが行われていく。

国内の製糸業者さんは、その銀行にお金を出すだけではなくて、儲かった分だけもっと他の事業に投資する。例えば紡績だとか鉱業、鉄とか金とかの鉱業とかにお金を出していく。そういう仕組みでまたそこで為替が使われて、そこに新しい産業だとか新しい銀行が出来ていくみたいな形で日本の明治の産業革命がぐーんと広がっていく。

ここに荷為替取引というか、生糸売込商が倉庫に持っている在庫の生糸を外国商館に渡すっていう、荷物を渡すということと、それと同時に金銭の決済をするのがセットになっていく、荷物の受け渡しとお金の受け渡しがセットになっていく形なんですね。

銀行が出来てこういうものがパッと広がっていくというのが、明治の産業化の基本的なパターンです。そういうふうに言うと江戸時代はこのような仕組みがなかったのかと誤解されてしまうといけないので、ちょっとだけ言っておきますと、実は江戸時代からこのような為替の仕組みというのは、日本はものすごく発達していました。室町時代から日本は西日本と東日本で使っている貨幣が違ったんですね。戦国時代を通して江戸時代になって、幕府が一応、西側は銀、江戸を中心としたところが金、という貨幣を主に使おう、安い日常の買い物は銅貨でやろうという三貨制度というものを作ってそれをやっていたので、大坂と江戸で買い物をすると銀と金の交換をしなくては行かなくて、そのための両替商みたいな人がいて、例えば江戸の商人が大坂の着物を買ったとするじゃないですか。そうすると着物が船に乗って江戸に着くのですが、江戸の商人は大坂に？的にお金を送ったりしませんでした。だって小判とか金とかの重いものを船で運ぶと沈んだら一巻の終わりですし、人に運ばせると盗まれてしまうし、馬に運ばせると重すぎて、それも馬が逃げちゃったら危ないし、お金を動かすつもりがさらさらなかったのが江戸の経済で、どうしたかという、両替商が自分のところにそれぞれの商人の口座があって、そこで相互振替をやっていたんですね。そういうとちょっとびっくりする人がいるかもしれませんが、江戸時代は手形とか口座振替がものすごく発達していたんです。でもそれが発達していたのが江戸と東京？の間だったんです。それが明治維新になって生糸貿易で産業が広まって、江戸と東京間でやっていたようなことを、新しい銀行という形で全国でやるようになったというイメージで考えていただければよいかなと思います。

さて、さっき言った両替のところですが、洋銀 100 ドルに対して日本の銀 311 個、なぜこういう形かというと、重さで価値が出るので、重さが勝負なわけです。100 ドルに対して一分銀 31 個分の重さで釣り合うので、一分銀 1 個は 15 匁ですから、1 ドルは大体 45 文くらいのレートでスタートします。

それで生糸売込商が横浜で外人に生糸が売れると、代金が同時に入ってきます。この代金をこの場合は馬に乗って江戸まで運びまして、江戸で両替して、今度はその一分銀を持って現地に買い付けに行くことをやっていたわけです。

ところが、さっき江戸と東京の話をしましたけれども、そんなことをやられなくなって、ある日、横浜で、現地で両替する人があらわれます。この時に両替は両替なんですけれども、江戸では金と銀が両替されていた。横浜の両替商は日本の銀と洋銀を両替していたので、江戸時代の両替商とはちょっと違うのでドル屋という言い方をします。輸出商は売ると洋銀が入ってくる、輸入商は買い付けをするために洋銀が必要ということで、向きが反対になるんですね。ドル屋は輸出商と輸入商の両方に行って、たとえば輸出商から洋銀を買って、輸入商に洋銀を売るわけです。そうすると輸出商から洋銀を安く買って輸入商に洋銀を高く売る。買って売る時の値段の差、これをスプレットと言うんですが、このスプレットによってドル屋さんは儲けていました。反対側で、一分銀を輸入商から買って、輸出商に一分銀

で売る、その時も一分銀の間で売り買いスプレットを抜いていて、それによって両替商は儲けるということをやっていました。

1862年にその両替商の中で、肥前屋として、これは個人の名前ではなくて屋号なのですが、やっていた人は高島嘉右衛門という横浜では超有名な人なのですが、この人は若い頃に、両替商がいちいち輸入商のところに行って、自分が全部聞いてやっているのではなくて、例えばどっちかが足りないみたいなことも起こるわけです。そういうことがあったら困るので、両替しながら「お前、余ってないかな」と聞いたりするわけじゃないですか。そういうことを考え出して、小助（肥前屋）のところに行けばそこにドル屋さんが集まっていて、お互いに「俺、今日一分、持ってるんだけど」「俺、洋銀余ってるんだ」とか言って、「今日、お前の洋銀、ちょっと貸してくれよ」というようなことが行われていたというふうに伝わっています。

そのようにやっていたビジネスを才取と言います。要するに業者間の繋ぎをやっているのが才取さんです。

1864年には両替商が30軒ぐらいになって、結構な数の両替商がいました。面白いのは実は日本の一分銀は、輸出で貿易が盛んになることは想定されていないので、ただでさえ商売で銀の量が足りないのに、絶対量がすごく足りなくなってしまうということがあったかということ、洋銀に対して値上がりするんですね。今でいう円高みたいなことが起こります。

みなさん考えてみてください。円高になると輸出商はどうなるんですか。損するんですね。円安になると輸出商は得するんですね。円高になると輸出商は損する。円高になると輸入商は得するんですね。実は45匁だった最初の相場が円高で37匁、日本銀高になったので、輸出商は結構、損をしています。一方で輸入商はめちゃくちゃ儲かったと言います。

ただ輸出商はこのレートで為替で損しても、さっき言ったとおり、保管料や手数料とか立替金利で減茶苦茶、生産農家から貰ってますので、レートが下がったくらいで別に何とも思わなかったみたいなことが記録に残っています。

というように今、ビジネスの大体のモデルを説明したところですが、さてもう一度、明治元年に糸平が両替会所を作ったというところに話を戻します。

今、言ったように両替をやっている人たちがいて、最初は貿易の？の為に両替をやっていたんですが、だんだん相場が毎日変動するところで、安く買って高く売るというのを、今日、安く買って、明日、高く売って、そういうふうにしてリーディングして儲けようみたいな人が結構、現れてくるんですね。『横浜市史稿』によれば、糸平は明治元年に横浜の自店舗を提供して、両替の会所、会所っているのは取引所、今で言うFX取引所を作ります。これは誰かに作れと命令されたわけではなく、あるいは誰かに免許を貰ったわけでもなく、本当に勝手に作ります。勝手に作っちゃうんですけれども、ふつうの人だったら勝手に作ったって「あいつ、何やってるんだ」って無視されるんですけれども、糸平がそれをやると横浜の大物商人が集まってそこで取引をするわけです。

要は今までは輸出商とか輸入商のところがいちいちお伺い、御用聞きをして、そこで売り買いを上手く繋いでいく、結構、手間がかかったんですけれども、今度は会所に行きさえすればそこにみんな集まって来ていて、みんなそれぞれ注文を持ってきていて、はみ出ている部分はそこで補えばよいという、非常に便利なのですね。

それを開いて、なおかつ勝手に、貿易とはまったく関係なく、単純にドルを買って円を売るというリーディングをやっている人たちも入ってきて、ものすごく便利になるわけです。為替の時って？たり？たり非常に便利、私たちの世界では合理性って言うんですけれども、合理性と一緒に付いてきます。その中で、会所に来る人たちってみんなドル屋さんなんですよね。ドル屋さんが来て、ドル屋さん同士の取引を繋ぐ人たちが会所にはいるわけです。さっき言いました肥前屋小助、才取さんですね。才取業者が会所にいて、ドル屋が才取って言うと、才取がドル屋同士の売り買いの注文を繋ぐということをやります。

清之助は横浜に2回目に来た時に最初にやったお仕事が、才取さんなんです。なんで清之助は才取をやったかと言うと、ドル屋さんをやるには、ドルを買う、あるいは銀を買うっていう最初の資本が要るじゃないですか、お金が必要ですね。お金がない、何もない若者にとって、最初に何をやるかと言うと才取はすごくやりやすいわけです。なぜなら、右の注文と左の注文をぶつけて、ぶつかったらその手数料を貰うということで、自分自身のお金が必要ないんですね。そこで才取をやってみるか、それでやったんですね。それが多分、ものすごく上手だった。あるいは才取をやりつつ儲かってくと自分で相場を張って、それもしこたま儲かったんだと思います。

ということで清之助にしては、これが足ががりでものすごく上手いドル屋さんとして有名になっていく。一方で糸平は、この頃すでに会所を作って大物が集まってくるくらい、いわゆる見識、能力、信用がずば抜けてあったんですね。要するに、もともとのお金持ちのお坊ちゃんとかどこかの大名の息子とか、そういうわけでも何でもなし。ただ実力だけで、生き馬の目を抜くこの横浜で認められて、会所を作って、頭に就任しているところから見ても、相当、彼は有名人というか信用のある人になっていたことが分かります。

糸平の生涯から考えると、実はこういう取引所を作るっていうビジネスが終生、得意になる。この後、いっぱい取引所を作ったりするんですが、これが一番最初だと言われています。また糸平の話なんですけれども、翌年、横浜に為替会社というのを作り、創立に関わります。この為替会社が、横浜に作ろうとお金を出し合ったという、銀行です。政府の肝煎りで日本全国に商社と銀行をセットで6カ所作って、横浜にも商社と銀行が作られるのですが、横浜に作られた銀行については、先ほど言った生糸売込商で儲かった人間がお金を出し合って作っています。頭取というトップには売込商のトップである茂木惣兵衛、原善三郎ら錚々たるメンバーが就任して、糸平は頭取ではなくてその下の貸方というところの実務者のトップになっています。

ただ、この為替会社というのは非常に変わった会社で、実は私も知ってすごく驚いたんですが、ドル紙幣を横浜の銀行が作っていたんです。日本銀を作ってなくてドルを作ってたんです。それくらいドルが足りなくて貿易の決済に困っていたので、横浜為替会社にドル札を作らせるみたいなことをやっています。その際に発行規則を作らなくては行けなくて、そんな規則は日本のどこにもないのですが、その最初の規則を設定した責任者が糸平さんですね。紙幣の発行と言う、今で言う日銀がやるようなすごい高度な金融の実務、しかもそれがドル紙幣の規則を作るということを任されるということで、糸平が、どんなに金融に対する実務能力が高いとみんなから思われていたかというのが非常によく分かります。

実はドル紙幣を発行するというようなことを日本の役所側でやっていたのが、渋沢栄一さんですね。おそらく渋沢栄一はこの頃から、茂木さんや原さんや糸平と仕事を通じて知り合いだったと思いますが、ドル紙幣の発行というところをこなしていく糸平というのを、この時、渋沢は役人になったばかりで、

大蔵省に入られたばかりだったんですけれども、おそらく「この田中さんてすげえな」と思ったはずで
す。多分、渋沢さんにとって「糸平さん、すげえな」というのもあったと思うし、おそらく反対側の横
浜の？たちも、「新しく来た渋沢ってすごくない？」っていうようなことを多分、言っていた、そうい
う？もあったと思います。これはあくまでも私の思い？ですけれども。でもいろいろなことを統合して
みると、どうもこの頃からお互いに信頼関係みたいなものが出来て行ったような気がします。

それで、やっと清之助さんがメインになっていくんですが、明治に才取業を始めて、実力者になって
いった今村清之助は、両替商として知られているお店をやっと作って、島清という？を始めます。ちょ
っとこの頃のエピソードとして、彼が借金を巡って田中平八と喧嘩する、みたいな有名なエピソードが
この頃にあります。私が見つけたのは1909年、明治39年に出版されている『豪商の雇人時代：商人立
志』という書物ですけれども、その中で、清之助の奉公先が借金をして、その借金を返せなくて困
っているところを、貸主である田中平八が取り立てに来て、清之助が「ちょっと待ってくれ」と直談判
した時の話なんですけれども、平八が借金の延滞を断ったところ、ここに書いてあるとおり清之助が「な
んだあ、天下の糸平とも言われる人がこれくらいの事で考えてみるって、聞いてあきれらあ（中略）僅
か2、3萬の金で人助けができるってのに、ぐずぐずしているとは同国人の面汚しだあ。ましてやほか
でもないこの今村清之助が頭下げて頼むんだ。今すぐきっぱり返事をしてくれ」と言ったという記録が
その本に書いてあります。

この頃、清之助がどこに奉公していたのかはよく分からなくて、おそらく自立して才取業みたいなこ
とをこつこつやって、有名になって、両替商としてそれなりに目立って行って、屋号を持っていないこ
とは別にして、こつこつと稼いでいる頃のことだと思うのですが。島清、島田屋というお店を作るにあ
たっては、横浜の中でいわゆるお店の商権みたいなものがあるんですね。おそらく平野屋だかどうか分
かりませんが、没落して商売が出来なくなった店の商業権を買い取って、多分、それに絡んだ話だと思
っています。

ただ、これが実話かどうかはよく分からないのですが、糸平が苦笑いをして、分かった分かったとい
うことで、借金返済を繰り返して、清之助の名前が一躍、横浜中に鳴り響いたという伝説になっていま
す。

まったくなかった話では噂話にもならないので、なんかこういうエピソードがあったと思うのですが、
古い話で、みんな話をごりごりに盛るので、どこが本当のことか分からないのですけれども、ここで分
かるのは、少なくとも「この今村清之助が」と言っているところを見ると、少なくとも糸平と清之助が
まったく没交渉で知り合いでもなんでもなかったことは絶対にない、当然、非常によく知っている知り
合いとして会していたことが分かります。

また、さっき言いましたように、会所の頭取になっている横浜の名士に対してこういうことが言える、
談判できるという実績がすでに清之助に備わっていたということが分かるので、おそらくこのエピソード
というのは明治3年以降か明治3年その頃の可能性がある。あと、おそらく島田屋を開業した時の箔
つけのエピソードみたいにして、こんな話が広まった。実際には僕もよく、家の奥さんに対しては「会
社でいろいろ文句言っちゃった、部長に」とか言って、部長に「お前こうだろ」とか言ってやったんだ
とか言ってますが、実際に部長の前では「はっ、そうでございますね」とか言ってることが多いわけ
でしょ？

多分、清之助も糸平には「糸平さん。考えてくださいよ」みたいな口調で言いつつ、他の人には「言っただけだよお」みたいなことを言っていた、というようなことではないかと思えますけれども、清之助と平八がこのような関係にあったということは想像していただければよいかなと思えます。

ここ（画面）に出ていますのは為替会社を作った時の、横浜為替会社の役員たちの名前、下側は洋銀、洋札を作った時の規則集で、規則を制定した時の責任者の名前が左側に出ています。そういうものですよと言うことと、1872年のいろいろな資料を探したのですが、まとまって生糸を輸出している業者の実績みたいなものが出て来るのは、1872年頃しかなくて、1872年頃の実績を見ても、糸平って探してみると分かりますけれども、結構、あちこちでそれなりのロットを扱っているということは分かっていただけだと思います。

あとこの頃、東京―横浜間で鉄道が開通しまして、明治帝が横浜に来られた時に横浜商人5人が挨拶をするんですが、その代表の5人の中に糸平は選ばれています。ということで完全に横浜を代表する大商人になっていきます。

1872年、明治5年に糸平は横浜に金穀取引所というのを作ります。官許、国の免許を受けて取引所を作ります。金穀取引所というのは、お米の取引と先ほどの両替取引、ドルの取引を合わせた取引所です。糸平とか10人、いつものメンバー、原善三郎や茂木惣兵衛と一緒に糸平も頭取のひとりとして、その金穀取引所では今村清之助は才取ではなくて仲買人というかたちで参加していて、私がいろいろ調べた資料の中では役員に押されたのだけれども、ほとんど役員待遇みたいな大物の仲買人になっているんです。

こういうものを作った背景としてはまず、江戸時代から有名な堂島米買所というのが明治になって閉鎖されて、実は日本にお米の取引所というのはなかったんです。お米の取引所がなくてお米の流通にみんな困っていたんですが、堂島米買所にはあまりよいイメージが明治政府になかったものだから、代わる取引所がなかった。

そこで日本にいる外国人が勝手に米の取引とか始めちゃって、それだったら日本人がやっただけじゃいいじゃないかということで、こういう取引所が大好きな糸平が横浜で米の取引所をやろうと言って、官許を受けてそこにみんなも乗ってくるみたいな感じになっている。

実は折角作った金穀取引所なんですけど、たった2年で潰れてしまいます。なんで潰れたのかと言いますと、実は香港上海銀行にフィドンという中国人ディーラー（買辦）がいて、横浜金穀取引所で洋銀を売り崩す、相場戦を仕掛けてきたんですね。一方で糸平とか清之助は、これから貿易はもっと盛んになるのに洋銀がもっと必要になる、洋銀の値段が上がるのは決まっているじゃないかと思って、香港上海銀行のフィドンが売り崩してきた洋銀を買いに回るんですよ。いわゆる相場戦というんですけれども、結構激しい相場戦をやっていきます。多分、日本で一番最初の相場戦と言ってもいい？の相場戦をやります。

しかし相手が悪い。なにせ香港上海銀行というのはイギリスそのものみたいな銀行ですが、資金量が桁外れで、いかに糸平や清之助がお金持ちといっても、劣勢になるんですね。やばいことになっていきます。その時に横浜金穀取引所というのが糸平にとってというか、自分の取引所なんです。あるいは清之助にとってもほとんど役員待遇ということで、彼らは何をやったかと言うと、追い込まれたところで取引所のルールを、自分たちの取引所ですから、ルールを勝手に変えちゃうんです。要はどうしたか

というと、現金の担保がないとこれ以上の取引は認めないというルールを勝手に入れるんですね。それで「現金の担保をすぐ取引所で私たちに見せろ」と言い出すんです。それで実は清之助と平八も担保なんか持ってないんです。お金もぎりぎりまで？なので。なので千両箱に石とか釘とかを積み上げて、一番上側だけ金貨で隠してですね、それで取引所に持ってきて、自分たちで検査しますから、「はい、担保オーケー」。一方でフィドン側は香港に金とか大量にありますけれども、日本で急に言われたって運んで行けないじゃないですか。運んで行けないわけです。そうしたら「はい。ここまで」と言うわけですね。それは無茶苦茶に怒るわけです。ふざけんな！って怒っても怒っても？でイギリス人が？何をやってたかと言うと「はい、痛み分け」って言って引受けちゃうんですね。本当にイギリスが激怒して、そのせいでこの取引所は潰れてしまいます。滅茶苦茶で信用を失ってしまったわけで、この取引所は潰れてしまいます。

平八は平然と横浜に居続けるんですが、清之助を中心とする若手、若手というかいわゆるドル屋さんたちは横浜にちょっと居づらくなって、本拠を東京の方に移していくことになっていきます。

1877年、フィドンのことがあって清之助は東京の堺町、今の人形町の3丁目辺りに本拠を構えます。横浜時代に稼いだお金が大量にあって、清之助を慕ってついてくる横浜のドル屋さんたちも来たんですが、実は彼は何をやってたかと言うと公債の売買を行っていました。

公債とは何かということこれから説明したいと思います。

明治になりまして一番大きな出来事は何でしたかと言うと、廃藩置県なんですね。要するに版籍奉還。まず明治2年に版籍奉還があってそのあと廃藩置県になるんですが、要は藩がなくなっちゃうんですね。そうするとそこに今までお仕えしていた武士たちが奉公先がなくなるわけです。

私は子どもの頃、武士たちが突然、失業したと聞いていたんですが、失業したのはしたんですけども、実は各藩が武士に渡していた家禄、給料は、代わって明治政府が払うという約束になっていたんです。なので明治政府は実は明治元年、1868年に大量の負債、支払い債務ですね、武士に給料を払うというのを引き受けたんです。ところが明治政府は出来たばかりで税金なんかほとんどありませんから、いきなり武士に給料を払うお金がなくなって困っちゃうわけです。その時の明治政府を運営してきた人たちって、まあ何というか無茶苦茶な人たちですよ。なので、「もう払えない。武士の給料カットカット」って平気で思っちゃうわけですよ。自分たちも武士だったくせに平気で思っちゃうんですね。

1873年に明治政府は希望する士族に対して「手を挙げてくれたら残りの給料を債券の形にして、それを渡します」と言います。これは秩禄公債と言います。画面上で言うとピンクがかっている公債、債券、この証書を渡すことをやります。

大勢の武士が先行き不安なので、明治政府がこっちだったら安全だということを信じて応じた人もいますが、圧倒的な武士たちがこれに手を挙げませんでした。なので依然として武士に給料を払うのに困ってしまった明治政府が、とうとう3年後に全士族強制で家禄を召し上げて、残っている家禄の分を金禄公債という形にして武士に渡します、という制度を取り入れます。

これは画面上で言えば、右側の金禄公債というところになります。いわば家禄が全部なくなって金禄公債というものに、武士の給料が変わったわけです。実はこの裏側には、この公債をさっき言いました全国に出来ている銀行に現物出資と言う形で、商品として出資すれば、それに応じて株券がもらえて、その銀行の配当とか銀行が値上げすることによって株価が値上がりするというで武士は生きて行

きなさいみたいな仕掛けになっていたんですが、なにせこの間までちょん髷を結って刀を差していた人たちがいきなりこんな債券を渡されて、正直言ってほとんどの人は意味が分からないという状態だったわけです。何だこれ、みたいなことになるわけです。お金は貰えなくなって紙切れを渡されます。「何これ」って言って本当に困るわけです。明日食べるお米がない、お金がないのにこんな紙切れ渡されてどうするんだよ、みたいなことになるわけです。

まさにそういう武士たちが困り切っている時に、人形町の砂糖の蔵があるんですけども、そこに行くと訳の分からない紙切れがお金に替わるよっていう噂が広がるんですね。これを持って人形町にある？の蔵に行ってみると、結構なお金を払ってくれる人がいる、買い取ってくれる人がいたんですね。これが今村清之助です。それが今村清之助と横浜組という人たちでした。ちなみに私が横浜組、横浜組と言っているのは、両替をやっていた人たちは東京と横浜にいて、横浜の新参者という人たちが横浜組と言われていたわけですが、そういう意味で東京に対して横浜組という意味なんですけど、横浜組の人たちが買い取りをやっていた。東京組でもこういうことをやっていた人が一人いて、安田善次郎ですね。皆さんご存知の後の安田財閥を作るんですが、安田善次郎も清之助なんかと一緒にこれをやっていたわけです。

彼らは武士たちから買い取って、ただその債券を持っているわけではなくて、日本全国に出来ていく銀行の銀行家たちに売ります。武士たちから安く買って銀行に高く売る。銀行は現物出資を受け入れなければいけない形になっていますから、出資を受け入れるよりは割安に清之助たちから債権を買えますので喜んで買うわけです。そして安く買った差額の部分を今村たちは儲けることになります。

時は、どんな時だったかと言うと、まさに征韓論が激烈に戦わされて、西郷さんは征韓論で論争に負けて下野する、東京からいなくなるというちょうどその時で、東京は騒然としていたんです。日本中の武士が貧乏で滅茶苦茶怒っている。韓国に討伐に行けなくて怒っているのではなくて、こういうふうにして家禄をとりあげられて、生活していけなくて無茶苦茶怒っている。その最中にまさにその火種の元である公債を東京で結構安く買い付けているので、私はちょっと心配になって、今村はこの時、命を狙われたんじゃないかと思って経済史の専門家の先生に聞いたんですが、まったく反対だったそうで、とにかく生活に困っている武士にとってみれば、お金の換えてくれる神のような人だと思われていたらしいです。よかったねと思う反面に、いかに金融リテラシーというものをちゃんと持ってないととんでもないことになったかということだったのですけれども。でもまあ、そういうことだとすると、逆に政府としては、そんなことが堂々とまかり通っていることは、今のところ武士たちは怒ってないみたいだけれど、もしも本当のことに気づけば大騒ぎになるかもしれないわけです。それで非常にびびっていて、これは何とかしなきゃいけないなというふうには思っていました。

ということで、実は明治政府としては、一刻も早く今村たちがやっている公債の売買を公の場所で、ちゃんとした形でやらなきゃいけないとすごく焦って、その制度を作ろうということで、試案を？していくということが行われます。

そうしている間にも今村たちの取引額というのは凄く大きくなっていきまして、最初は売りに来る武士たちから買い取ってという単純な構造だったのが、やはり横浜時代と同じ式に、武士たちから買い取りをする専門の仲買人たちが集まって、仲買人同士で債券の売買をするというようなことになって、終いには、3か月ごとに債券の売買をしていたのが先物取引を始めちゃう。私的な取引なんですけど、ものすごく大きな会社になってしまって、ますます政府が焦ることになっていきます。

その政府の片方に渋沢栄一と言う人がいたわけなんです。彼はさっき言いましたように日本に余っている資金を銀行のところに集めて、銀行から資金を貸し出すという仕組みを作っていこうということを考えていたわけです。それで第一国立銀行というのを作っていくんですけども、その際にも第一国立銀行は三井のもの、三井という江戸時代からの大金持ちたちがお金を出したんですが、そうすると三井が好き勝手にやっちゃう銀行になってしまうので一般から広くお金を集める。合本と渋沢は呼んでいたんですが、一般から広くお金を集めて合本会社、つまり株式会社として第一国立銀行を作って、そこにいろいろなお金を集めて、そこから人にお金を貸していくみたいな合本制度を作ろうと考えていました。その時に、合本ですからみんなからたくさんお金を集めて皆さんに株式を渡す、というので、渡した株式がちゃんと売買できる場所を作らなくてははいけないので、合本組織のための株式の取引所を早く作ろうということで、渋沢は公債の売買を？することとは別に、それについてかなり一所懸命動いていました。

動いていたんですが明治6年の5月に渋沢は大蔵省を辞めてしまうので、民間で活動していましたけれども、民間で活動するなら株式取引所を作らなければいけない、という動きをしていた。その時に、今村たちが公債の売買ですごく大きくなっていく状況があって政府が慌てているというのがあって、これをうまく利用して株式取引所を作るのに持ち込もうと渋沢は考えるのです。

今村たちも政府が公債の売買を取引所で正式に売買したいというのをだんだん分かってきて、協力したいというのを考えている、というのを聞いた。というわけで政府と渋沢と今村たち横浜組がだいたい思惑を一致させて、取引所を作ろうという方向に動き出すということになります。

ただこの株式取引所を作ろうと言った時に、最大の問題が、仲買人ですね。ドル屋さんたちも仲買人だし、お米の時は米の仲買人で、株券の売買をする時は株券の売買をする仲買人、今で言う証券会社がないといけないわけです。ところが株式の取引所なんていうのは日本のどこにもないわけで、つまり証券会社を初めて作らなくてははいけないわけです。初めて証券会社をやる人というのはどういう人がやらなくてははいけないかというのは、実は大問題です。

渋沢栄一は最初、株式取引所を作ろうと自身が計画した時には、実は小野組と島田組という非常に強大な江戸時代から続いている両替商に、つまり金融業者にお任せしよう構想していたようです。しかし明治7年に政府の規則改正があって、貸し借りの担保を？するという規則改正をしたら、思わぬことに小野組と島田組がそれで倒産してしまうんです。そんな大きな両替商だったのに倒産しちゃうんです。渋沢が候補と考えていた両会社が倒産してしまって、証券会社候補がいなくなっちゃったんです。

そこでやはりクローズアップされてきたのが、私的に公債を売買している今村清之助と横浜組が仲買人になるというアイデアと、もう一つ、実はこの時、東京に米の取引所が、糸平は横浜に帝国会所？というのを作っていますが、同じところに東京に兜町米商会所というのと？米商会所という二つの米の取引所があって、両方の米の取引所の重役を糸平（田中平八）はやっていたんです。

それで田中平八のやっている米の仲買がそのまま株の取引の仲買人にどうかというアイデアが出てきます。公債の仲買人というには何となく分かるのですが、米の仲買人というには、何で米の仲買人が株の仲買人をやれるのと皆さん、お思いになるかもしれないですが、実は日本で江戸時代、堂島の米会所というのがあって、お米の取引をやっていたというふうに聞いたりするのですが、堂島の米会所で売買されていたのは実はお米そのものではなくて、米切手という証券の売買がされていました。堂島米会所というのは実は証券取引所だったんです。

そうなので実はこの流れを汲んで、横浜や大阪で米の売買をやっているんですが、実は生のお米の取引と言うのは堂島でやっているルールをそのまま受け継いでいるので、江戸時代の証券取引のルールを引き継いでいたんですね。だから、江戸時代の証券取引のルールを知っている米の仲買人を株式の取引の仲買人にするというアイデアは別におかしなことではなく、渋沢としては一刻も早く取引を実現したいが小野組や島田組はないとなると、仲買人は公債の売買をやっている人たちを入れ込んで、米の売買をやっている人たちと一緒に入れ込んで、要するに清之助と平八を巻き込んで、この人たちを仲買人にすれば早いなということに気がつく。それで取引所を作ろうというのを彼は考えつくわけです。

ただ、渋沢は躊躇する部分があったわけです。もちろん渋沢は糸平のことをよく知っていて能力が高いことも分かっている、その能力を高く評価しているんだけど躊躇することがあった。それはなぜか。横浜の金穀取引所を一回、潰しているということです、この二人は。それで渋沢は第一国立銀行という、自分の命の次に大事な、合本主義のための、世の中をよくするための組織、会社を作って？していたので、勝手に自分の利益のために減茶苦茶にするような取引所には絶対にしたくないんです。政府としては、政府が発行している公債を売買するところですから、これも同じように自分たちの私的な利益を儲けるために勝手な売買をすることは絶対に許されないというような支障があって、「そのところ、糸平さん、清之助さん、大丈夫なの？」が引っかかった。そういうことがあって、そのところを相当、糸平と清之助と話をした形跡があります。

ここがさらにポイントなんです、清之助と糸平はものすごく渋沢さんのことを尊敬していたらしいんですね。渋沢ってこの頃まだ若かったんですが、人を尊敬させるような、独特なキャラクターがあったんでしょね。清之助も糸平もどうも、「お前たちに勝手な思いはさせないぞ」という理屈で話してくる渋沢さんなんだけれども、「君の言うことはもっともだ」という感じで二人とも渋沢構想に全面的に協力するということになっていきます。なので渋沢は清之助と糸平と組んで、仲買人の清之助と糸平と組んで、そういう彼らが知っているルールをちゃんと取引所でルール化して、株式取引所を作ろうという方向で調整を計っていきます。そしてそのルールにもとづいて株式取引条例を作っていく方向に行きます。

もう一つ渋沢が悩んでいたのは、実は株式取引所というのは全世界でいろいろあったんですけども、すべてが官立組織というもので、株式会社ではありませんでした。これはどういうことかという、要するに株式取引というのはプロがやるもので素人がやることではない。そうするとプロである株式取引をやっている仲買人たちが、自分たちでルールを決めて、自分たちでルール違反をした人を排除して、お互いに監視し合うちゃんとした取引をしようという会員組織なんです。そういうことがあって初めて株式取引所と言うのは出来ていくんですが、証券会社も初めて作り取引所も初めて作るというような状態の中で、組織みたいな形にすることはできないわけです。

それで繰り返しになりますけれども、力のある平八が力のある清之助みたいな人と組むと、へたをすると彼らが株式会社を白紙？にしかねない。もちろん彼らは協力してくれているけれども心変わりしたらかなわないわけで、それは物理的にそうならないように担保？しなきゃいけない時に、渋沢としては思いつくことがあるわけです。

彼が第一国立銀行を作った時に、三井と小野という人たちがほとんどお金を出していたわけですがけれども、他の人たちを誘って、三井や小野だけに勝手にさせないように株式会社化したんですけども、それと同じように東京株式取引所を作った時も簡易組織ではなくて株式会社化して、仲買人たち、つま

り清之助や平八だけではない、あるいは横浜組だけではない、全然関係のない人たちも株式取引所の株主にして、清之助や平八の影響力を薄くして立ち上げるということを計画して、実際に調整もしていく。そんな勝手なことをしたら清之助や糸平は怒りますから、そういうことも含めて実は清之助、糸平と調整して話を進めて行ったということのようです。

1877年、明治10年に設立の請願というものを渋沢が中心になって、お役所に「どうかこれを作ってください」と請願をあげるんですが、その時、清之助と糸平は請願者？のところから完全に名前がはずれています。

これはどういうことなのかと言うと、お役所に申請する時に、横浜の取引所でやらかしちゃった二人とか横浜組が入っていると、何かとまずいわけでしょうね。みんな分かっていますよ、分かっているけれど名前が入っているといろいろ攻撃されるというわけで、そういうことがないように二人はその時に身を引いて、三井の人たちとか華族とか有名人が名を連ねて請願する形になる。

そういうことをお膳立てしたのが清之助や糸平、渋沢の三人であることが、実は出来たときの取引所の株主の名簿一覧を見た瞬間に、清之助や糸平はちゃんと入っている。請願した時には入ってないですね、そういうことを見ると、ちゃんと調整したということがこれからしても分かる。

1878年の明治11年に、東京株式取引所というのがちゃんと設立されて、清之助は創立證書の3人目にサインをしています。

これが東証が持っている創立證書の原本の写真です。見てください。前方が深川亮蔵という方です。深川亮蔵というのは華族で、高崎藩、元肥前藩の家老です。その次が澁澤栄一で直筆です。栄一さんがサインされてその隣側読めますでしょうか、今村清之助ですよ。その隣が三井、これは三井物産の関係者です。木村さんと、その？方は三井物産の社長ですけれどもものすごい優秀な人物なんですね。その隣が三野村利助とありますけれども、三野村利左衛門という方の跡継ぎになりますけれども、三野村利左衛門と言う人は事実上、明治の三井家を救ったといわれる大番頭ですね。その跡継ぎです。その隣の？という方が元文部大臣、今で言う文部大臣で、その隣の小林さんという方は一般投資家です。その隣に平八、というサインになっています。

渋沢栄一と今村清之助は同株数98株持っていて、使われる？が120株になっています。あとは100株から80株ぐらいがずらっと並べるんですけれども、ちょっとこれを見ていかにも平八のサインの？ですね。10番目のちょうどこの辺りというのが、ここ数年、糸平のことを考えている私にしてみれば、ああ、平八は？に名前を書いているなという気がします。

ちなみに後ろ側に送っていくと？という平八の実父ですね、平八の実のお父さんとか平八の子どもが三人出てきます。ということで、実は家族の名義の株数を全部足すと、渋沢と今村の株を越えるんですね。いかにも平八のやりそうなところで、とはいえ、この株は全部で2000株出していますから、150~60株というとその影響は渋沢の狙い通り、大して影響力はないんですが、やはり取引所を作ったのが平八と渋沢と今村だということ、このサインのされ方からしても、みなさん、よく分かっていただけだと思います。

あと平八と糸平と同時代の商人たち、今村清之助と明らかに知り合いだった人たちを（この図に）並べさせていただいています。いかつい怖い人が雨宮敬次郎といって、彼は愛知県出身の人で横浜の？です。清之助よりもちょっと年上ですが、おそらく横浜ではずっと一緒だったと思います。雨宮敬次郎

というのは軽井沢を作った人物ですね。平八が亡くなった時に天下の糸平という大きいお墓を作るんですが、伊藤博文を捕まえて「揮毫してくれ」と言った平八の弟分、そういう意味ではかなり親密な仲だったと思います。その隣が原善三郎ですね。横浜で知らない人はいないという、事実上今の横浜銀行につながる、一番最初の創業者だったと思います。真ん中が天下の平八です。高島嘉右衛門、その隣が安田財閥の創始者安田善次郎。公債の売買で一緒だったと思います。あと大倉喜八郎。彼も横浜でビジネスをやっていて、多分、清之助とは知り合いだったと思います。

取引所が出来た後の話なんですけど、明治5年に今村商店というのが出来たと言いましたけれども、取引所が出来た後に日本橋の茅場町、南茅場町というのは今、私がいる取引所のすぐ向かい側辺りなんですけれども、そこに今村商店を転居しまして、正式に取引所の会員になっています。

これがここにある、小さくて大変申し訳ないんですけども、大きく出来ないんですけども、申し訳ないんですけども。これが実はみずほ証券がどのように出来たかという図ですね。一番上のところが今村商店です。正面のところ？が今村商店で、ここにあるいろいろなのが証券会社ですけども、角丸証券とつながっていったあとに、最後は今のみずほ証券が吸収合併したってことで、(清之助は)みずほ証券の直接の創設者ではないですけども、辿っていけばみずほ証券の創設者の一人と言えらると思います。

彼は日本で最初の仲買人になるわけですけども、仲買人としての清之助というのは、実は私は名前を存じ上げなかったんですけども、50年前ならば、私が生まれたところに証券界にいた人ならば、誰もが清之助という名前を知っていたそうです。かなり有名人で、明治時代には今村將軍というふうに相場界では言われていた。福沢桃介という相場の名人がいますが、彼は福沢諭吉の娘婿で、実はこのあとお話ししますが、色男で有名な人なんですけども、相場は上手だったんです。この福沢桃介の本の中に、いろいろ売買していると「三菱財閥の代理人として大物の今村が出てきたぜ」みたいなタイトルがあるんですね。そういう意味でも福沢桃介みたいな人から見ても格上、別格の人物として清之助が出て来るので、証券界では相当な大物として知られていたそうです。

中でもとある仕手戦で、今村清之助は買い方に回って、敗色濃厚、つまりお金を清算しなければいけない、お金がないはずなのに、なぜか分厚い財布を持って現れて、にこにこ笑いながらお金を払っていく姿があって、それを見た売り方に回っていた人たちが、「あれっ、清之助、まだまだお金あるぞ」と思って、寝返って清之助と同じ買い方に回って、清之助は苦しいところから一発大逆転して大儲けした、なんていうか、戦国時代に柴田勝家が新潟の方で上杉軍と戦って籠城したというときに亀割柴田という有名な話があるんですけども、似たような話が今村清之助にもあります。それくらい相場が上手だったというふうに言われています。

1884年、明治17年の10月に、彼は欧米の証券会社の視察にお出かけになります。実はなぜこの時期に行ったのかなあというのと、田中平八が同年6月に熱海でお亡くなりになっているんですね。51歳の若さでお亡くなりになっているんですけども、その後の10月にふっと外遊、海外視察に行かれていますので、私はちょっとロマンチストなので、長年の同志だった平八をなくして、ちょっと淋しくなって海外に行ったのかなと思っています。そんな証拠はどこにもありませんが、勝手に思っています。

欧米の証券会社に行った時に、たまたま、陸奥宗光と船の中で一緒になりまして、ずっと一緒に回って？をします。その時に欧州で証券会社を見て思ったことは、欧州では証券会社はとても信用されているし、すごく尊敬されているんですね。それを見て帰ってきたので、清之助はですね、やはり日本の証券会社

の地位はまだまだ低いと思って、何とかして証券会社の地位を上げなきゃいけないということを考えるようになったそうです。

明治 24 年には私たち東京証券取引所の前身である東京株式取引所の相談役に就任されていて、あるいは明治 26 年には、今ある、日本証券学協会という証券会社の協会があるんですけども、その原型となります日本証券業社クラブというものを実は清之助さんは作っています。これはすべて、証券会社の地位を向上するためにいろいろなことをやらなきゃいけないとのことで、いろいろおやりになったそうです。また、証券会社が率先して株式取引会社としていろいろやらなければいけないんだと言って、？のようなことを熱心に説かれたりしていらっしやいます。

まあ、陸奥と一緒に廻ったことについては、ドイツの鉄道王のヴァンダービルトという人と会って、それですごく刺激を受けられて、広く民間から資本を募って、とりあえず資本を大きくして鉄道会社を作らなくてはいけないとすごく思われた。ちょうど？した時には彼は？でして、鉄道会社を作らなければいけないということをすごく思ったわけです。それで結局、そうやって大運動をして、両毛とか九州の鉄道会社の大株主になって、晩年は鉄道王と呼ばれるようになりました。東京の谷中に清之助の墓地があるんですけども、汽車の形をしたお墓です。

1888 年、明治 21 年には今村銀行というのを作ります。資本金 25 万円という非常な大金なんですけど、この 25 万円は奥さんが清之助が稼いだお金をこつこつ貯めて、25 万円になって、そのお金で銀行を作ったという美談がたくさん残っています。多分、そういうことだったのでしょう。この銀行は、実は昭和恐慌の時までずっと残ります。結構有名な有力な銀行として、名前が残っています。

1902 年、明治 35 年に今村はお亡くなりになっています。54 歳です。糸平が 51 歳ですから、お二人ともかなり若い時期に亡くなっています。

あとは次男の今村繁三さんという方が継がれます。無一文で長野から出てきた清之助ということからすると、息子の繁三さんの経歴は非常に華麗で、慶應幼稚舎からケンブリッジ大学留学という絵に描いたようなおぼっちゃまです。家督を継がれ、膨大な遺産を継がれたそうです。昭和 2 年に恐慌で今村銀行が壊れるところまで？です。ちなみにその、破綻した今村銀行が吸収されたのは、あの渋沢栄一が創った第一銀行ということでございます。

あとですね、清之助さんの話はここで終わるんですけども、清之助さんが残した株式会社制度？について簡単にお話しておきます。鉄道会社ブームなんですけれども、清之助さんがお帰りになった翌年あたりから、これは翌年辺りのグラフですけども、日本にはいろいろな産業、農業以外にも鉱工業、商業、金融というような産業が出来てきていました。それぞれの経済成長が左端の方に書いてあって、鉱工業は 44.5% ぐらい成長する、運輸業は 31.5% 押し上げるというわけで、日本の明治期の産業の成長を支えていたのが鉱工業と運輸業だということが分かっていただけたと思います。

運輸業の中のほとんどが鉄道資本の 22.9% です。清之助が帰国して、鉄道を作ろうよと言って、鉄道事業があつと広がって行った影響が如何に大きかったか、ということがこの表でみなさんに分かっていただけたと思います。

これは東京大学の先生に作っていただいたその当時の財界人の？と経済力の大きさを表したマップ？なんですけど、この表の真ん中の下のところに清之助がいます。田中平八も表の中にちらっといますが、平八に比べて清之助の方が、時期がだいぶあとだったということもあって、かなり図の円が大

きくなっているのが分かりますでしょうか。右側の一番大きな松本重太郎というのは関西で一番でかいです。大？、関西の渋沢栄一と言われた人ですので、そういう人たちとも清之助は強い繋がりがあったということが分かっていたか。清之助って実はすごい人だったということが分かって？

あと、明治期の株式会社について簡単に話をしておきます。明治期に株式会社として誕生した産業としては鉄道と紡績、電力で、明治期になって新しく出来た産業で？で？して、多額の設備投資がかかるところが株式会社になりました。一方で私立の銀行、鉱山、商社といったものは財閥が関わっていくということで、株式の公開が少し遅れていくことになります。

最初のころの株式会社にどういった人がお金を出したかという、もともと日本でお金を持っている人たちが中心だったんですが、それ以外に有力実業家と言われる人たち、有力実業家と言われる人たちとは平八や渋沢、あるいはさっき言った兩宮や原さん、安田さんというような人たちです。そういう人たちがお金を出して行って、株式会社を作ったんですね。でも日本で有数の株式会社といっても実際には100人に満たない出資者しかなくて、どこの株式会社を見てもだいたいみんな同じような顔ですね。それで、ひとつ傾いちゃうとみんな危なくなっちゃうような不安さもありました。

一方で天下に名前を知られる人たちがこの会社にお金を出しているんだみたいな形になっているので、「あの人がお金を出しているなら私もお金出そう」みたいなことで、そういう、人にお金を出させるような誘因になったそうです。「あさが来た」という大阪の（を舞台にした）連続ドラマがありましたけれども、その時に出てきた五代友厚が広岡浅子にお金を出したんです。それだとか、渋沢栄一が大阪紡績という会社を作った時に、大阪や関西の人たちからお金を集めたり、あるいは今村清之助は鉄道資金を出すというようなことが？になりました。

株式会社というのは1895年ぐらいから、どんどん増えて行って、（グラフの）灰色の部分が株式会社で、上側の部分が株式会社ではない会社なんですけれども、株式会社は増え方が、ちょっとずつですけども、ここの黄色の線ですね、黄色の線が株式会社の資本金ですけども、資本金は順調に増えていって順調に成長していったということが分かります。

株式会社制度が日本に果たした役割を簡単にまとめると、三つあります。まず市場での自由な競争というものを実現しました。具体的な例としては銀行なんですけれども、1年に16行ぐらい作られて25行ぐらい潰れるというようなものすごい激しい競争が実は続いていました。二つ目が大株主による企業統治というのが明治期の日本の特徴なんです、これはどういうことかという、商人たちが最初、生糸貿易でお金を儲けて、？から株主になって、会社を作って、彼らのお金に換えてまた会社を創るということをやっていくので、基本的には大株主＝経営者だったんですね、明治の最初の頃は。こういう状況が明治の最初の頃の特徴でした。逆に言えば大株主の人が会社を経営しているということなので、大株主になる人は限られているので、どこの会社の経営者も一緒ということがありました。逆に言えば同じ会社の経営者が、どこの会社も同じ経営者ということになると、政府には？会社でネットワークが非常に容易で、そのネットワークを作るところに実は渋沢さんたちが活躍するんですが、出来たネットワークが非常に限られていて狭い世界なので、今度はあそこに投資しようみたいな話が通しやすかったです。ということで、資金を効率的に使うところにお金を投じるという意味では、非常に便利に働いたというふうに言われています。

あとは彼らが、すなわち株主たちが日本を動かしているという状態なので、官僚たちに物を申すこと

が出来る状態で、要するに民の論理で世の中を動かしていくということで、最初はうまく行っていた。これが財閥化していくと強者の論理なので、弱者がこういうことを言えないみたいな状況になっていくんですが、最初の頃は民が団結して世の中を動かすということが出来る。あと最初に説明しましたがけれども、地域の経済を活性化するということが出来たということが言えます。あと経営者が投資家だったので、配当を高くしました。配当が高いから株価があがるというのが明治の会社でした。どんな会社も減茶苦茶、配当金を払いました。

ちなみに東京証券取引所は配当性向 100%、従業員の給料を全部払った後は、全部、株主に配当で返すということをやっていました。どこの会社も 80%程度だったわけです。それはほとんどの大株主が経営者ですから、当然といえば当然ですよ。あと、株の売買をしないんです。ずっと株を持っていて、政府に文句を言って、株主に有利になるように政府の法律を変えさせる、言葉は悪いですがレントシーカーみたいなやり方をやっています。

あと、福沢桃介というような人もいました。彼は投機的な個人投資家の特徴で、彼は株で大儲けしているんですが、仕手戦あるいは買占め事件に乗じる。あるいは日清日露戦争というのがあったのですが、その時に大きく株価が動くんですが、その予想が乗じて、そういったところで株で大儲けするみたいな人が現れています。

女性の投資家も明治に登場しています。富貴楼のお倉さんという方がいるんですが、彼女は実は平八の愛人というふうに言われていた人で、横浜に富貴楼という大きな、今で言う高級料亭を作っています。そこのお客さんが、要するに明治の大物のお客さんで、そこにいろいろな人が来て会話をするのをお倉は知って、それを株式投資に使った。平八も株の話をするのが大好きだったので、お倉に、「あの株、買っていいよ」とか言って、お倉はその株を買って大儲けしたらしいです。

お倉のお弟子さんの女性たちが、実は今の東京にある高級料亭、政治家が談合したりするあの料亭ですよ、あの料亭を実はお倉のお弟子さんたちが作っていったそうです。

もう一人、川上貞奴という人がいて、彼女は実はオッペケペで有名な川上音二郎の奥さんで、日本で最初の女優さんという人で減茶苦茶、美人だったという評判でした。ヨーロッパに行って公演した時には、あのロダンが「私のモデルになってくれ」と頼んだような減茶苦茶、美人だった。日本で第一号の女優で、大河ドラマでは松坂慶子がやった役の人ですが、この人は実は川上音二郎が亡くなった後、福沢桃介の公然たる恋人さん、愛人になっています。福沢桃介には房という奥さんがいたんですが、結構公然と愛人さんだということで、福沢桃介にいろいろ教えてもらって、株をたくさん持っていた。ちなみに、渋沢栄一に川上貞奴は会いに行っています。渋沢栄一さんも、忙しいのですが、美人が大好きだったらしいですね。ふつうはなかなか会えなかったらしいんですが、貞奴が会いたいと言うとすぐ会えたいらしいです。貞奴は何を頼みに行ったかという、「女優の学校を作りたいからお金を出して」って渋沢さんに言ったらしいんですが、渋沢さんは一言「いいよっ」って言ったらしいというお話が伝わっています。

株式会社の決算の開示ですが、当時、会計ルールが基本的になかったので、粉飾決算が結構あったのですが、粉飾決算？なので、配当金を払うために評価益などを何度も何度も出していて、今の東京電力は関東大震災の時に、利益がぜんぜん出なかったのに、前期の利益の 150%もの固定資産税評価益を計上するという今から考えると減茶苦茶なことをやって、配当金の支払いをしました。

こういうところから日本の株式会社の財務体質というのは進歩してきたんですよ、ということをお伝えしたいです。

あと、株式会社の役員には大株主自らが就任するケースが多かったようです。

ちょっと時間をオーバーしてしまいましたが、大変申し訳ございません。以上が？で終わります。

ちょっと？、『歴史を使って経済を学ぶ』という本を私、書いてまして、このアドレスのところから？していただければ、奈良時代、律令時代から昭和の現代まで？を使って日本の経済の歴史を？を使ってご説明する本を出していますので見てください。

今日、私がお話した話のさらに細かいバージョンを、「渋沢栄一と株式市場の人々」というタイトルで？から毎週水曜日にオンデマンドで放送しております。

このアドレスのところに行くと、オンデマンドの配信、まだ一回分しか公開していませんが、これから順次公開していきますので、ぜひ今日の話でもっと詳しく知りたいと思った方は、このオンデマンドの配信をぜひ見ていただければと思います。あと私が作ったゲーム「人生やり直し体験」というちょっと奇妙なゲームがありますので、これも興味がありましたらぜひ一度、見てください。

ということでございます。今日の参考資料はこちらの URL です。

ちょっとオーバーしてしまいました。長い時間、皆さんご視聴をまことにありがとうございました。

